

井上文雄研究史・補遺（其ノ三）

鈴木 亮

はじめに

本稿は、拙稿「井上文雄研究史」〔『成蹊人文研究』十三号、平成十七年三月〕、「井上文雄研究史（補遺）」〔『成蹊國文』四十一号、平成二十年三月〕、「井上文雄研究史・補遺（其ノ二）」〔『成蹊國文』四十三号、平成二十二年三月〕に於て、採り上げることのかなはなかつた、徳川時代後期国学者歌人井上文雄に就て言及のある文献を紹介することを目的とする。また、平成二十二年以降に発表せられた井上文雄に関する論考等をも併せて紹介するものである。

一、明治・大正期

・明治二十六年三月、国語国文の研究、作文の奨励をはかるべく落合直文を中心として同文会が結成せられる。同年四月には機関誌『文海』を刊行し、その二巻一号（明治二十七年四月）に文雄の「歌論」が掲載せられる。これは文雄の歌論書『伊勢の家づと 初篇』

より、「歌よむやう」「類題集詞よせ」「さよしぐれにいほまほしきことゝも」「序歌」「俳諧」の五篇を引用したものである。

・落合直文編『訂正五版中等国文読本 卷六』（明治三十一年十一月、明治書院）は、文雄の和文「古戦場」（『調鶴集』所収）を収める。なほ、「古戦場」はこれ以降各種の教科書、参考書等に収録せられることとなる。

・高津楯三郎、菊池壽人、杉敏介、今井彦三郎、松井簡治、和田英松編『近世名家文 高等国文 上』（明治三十三年五月、金港堂）は、「第一高等学校及び学習院国文課の教科書」（例言）であるが、矢張り「古戦場」が採られてゐる。

・海上胤平は、加藤千浪『詠史百首』の詠みぶりを批判した『詠史百首評論』（明治三十七年三月、文学書院）を著してゐるが、其処では文雄も槍玉に挙げられ、「俗歌者流の井上文雄」と罵倒せられ、また「東国の歌のさま殊更にわろくなしたるは、文雄らがしわざ」と迄非難せられる。

・井上文雄に私淑する歌人森田義郎は、「忘れられし井上文雄」〔大

八洲』二十一巻八号、明治三十九年八月)を著し、文雄の略伝を紹介し、「新しき想を、新しき詞をもて歌へるが尊かり。」とその傾倒ぶりを語る。文雄の全集を編纂し民友社印刷部から刊行する予定があると記すも、森田の「病軀」ゆゑ「果さず」。きはめて惜しむべきことである。

・森田義郎「井上文雄翁について(三)」「(東亜新報)明治四十一年五月十八日)は、松の門三艸子の談話から文雄の日常が窺へる。酒が好きだが、旅行はしない、気分があつさりした人であつたやうである。(一)(二)に就ては未詳³⁾。

・また、森田義郎は板本『調鶴集』をはじめ、松の門三艸子、蘭田守英がそれぞれ写した歌集から自ら好むところの歌百九十五首を選び出し『調鶴集抄』と題して、正宗敦夫発刊による歌学雑誌『国歌』(三十号、明治四十二年一月)の附録として発表した。

・佐々木信綱編『国民歌集』(明治四十二年三月、民友社)には、家集『調鶴集』より短歌一首「いさぎよきやまよまと心を心にてよそには咲かぬ花ざくらかな」(七四)が収録せられる。

・東京外国語学校の編にかゝる、同校国語漢文科の教科書『和漢文藻』(明治四十二年六月、東京外国語学校)には、「古戦場」が収められる。

・文学に関する読者の問ひに簡にして要を得た回答を示す「応問」(『國學院雑誌』十九巻一号、大正二年一月)に於ては、「井上文雄石川依平の略伝御教示を乞ふ」といふ問ひに対し、清宮秀堅「古学

小伝」を引きつ、文雄依平の伝記が語られる。

・吉田彌平、小島政吉、篠田利英、岡田正美編『四訂女子国語読本巻九』(大正七年七月、金港堂書籍)もまた「古戦場」を収める。

・雄物川町長をつとめた歌人佐々木順は、「自然歌人井上文雄」(『庭友』一号、大正八年二月、庭友社)を著し、文雄の自然(田園)趣味の詠に就ての所感を綴つてゐる。管見の及ぶ限り、雑誌『庭友』は秋田県立図書館が唯一の所蔵機関であるため、少々長くなるが全文を引用したい。

自然歌人井上文雄

佐々木順

近世の歌風は大体に於いて賀茂真淵を祖と仰ぐ^{あかたろ}県居派と、香川景樹を師と崇ぶ^{けいえん}桂園派に分たれる。前者は江戸を中心として幕府並びに諸藩に勢力を有し、後者は京都を根拠として宮廷に勢力を有し、互ひにその優劣を争つてゐた。文雄は村田春海の弟子岸本弓弦の門に学んで県居派に属し、萎靡沈滞したる江戸末期の歌壇に異光彩を放つた歌人である。彼は田安家の藩医であつて、通称を元真、家号を柯堂と云ひ、明治四年齡七十二で歿した。

文雄は国学に造詣があつて著書もかなり多い。殊にその歌論は穩健で秀抜である。彼は系統として崇古趣味を固守すべきで

あつたが、崇古趣味の型に囚はれず常に自由に清新にものを観、ものを感じてゐた。これは彼の凡庸ならざる点である。彼の得意とする所は自然の觀察の微妙にあり、精緻にあり、鋭敏にある。而してそれを表現するに當つて、自らなる格調と詞藻をもつてゐた。彼の家集『調鶴集』は、『続日本歌学全書』に収められてゐるが、われら田園に住んでゐる者にとつては寔に親しく懐しいものである。次に七八首私の好きな作を抜いて見る。

春雨にこぶしかつ散る山沿の小寺の垣根しとどなくなり
辛夷の花、鶉の鳴く音は暮春の情趣に適しい景物である。

春雨にあおむ垣根のこぼれ種茎だつ見れば鈴奈なりけり
作者はかうした微細な景致さへ見逃さない。われわれもかゝる用意が大切である。野趣に富んだ懐しい作

片岡のみちの小寺のつゝじ垣ほろ／＼散りて人かげもなし
簡素な表現のなかに静寂の境地がうたはれてゐる。一体彼の歌はすゝりとしてゐる。

水あせてなけば野となる沢水のすみれが中にかはづなくなり
概してかうした傾向の歌は一見平凡のやうであるが作者の自然に対する感興が率直に詠ぜられてゐる所に価値があつて、小理屈小感想の歌よりは尊いと思ふ。

宵よひの卯の花月夜子規ゐなかは早く夏めきにけり
簡素なそして穏雅な風調である。作者の氣稟が反映してゐる

のが有難い。

神無月柚の実いろづく柴垣の日かげのどけみ小鳥なくなり
俳句趣味である。修辭も俳句手法に近い。柚の実はゆずの実のこと、神無月は十月のこと。

落ちかかる夕日さびしき里川のつつみの穂蓼秋風のふく

かういふ歌は空想では作れぬ。のみならず第四句を穂蓼と名詞でとめ、直ちに秋風と名詞で続けて破綻をきたさぬ所が老巧である。

これらを味読すれば彼が如何に自然に対して愛着を感じ、憧憬を抱いてゐたかがわかるであらう。

(二月二十九日)

・齋藤茂吉は、森田義郎から『調鶴集抄』を借りて披見してをり、その次第を『重馬漫語』(大正八年八月、春陽堂)に記してゐる。そこで文雄を評して「文雄の歌風を一貫するのは軽妙の二字である。そして品の好い清心の歌が多い。新らしい材料で一寸他の歌人などの氣のつかないやうな細かいところを巧みに詠んでゐる。曙覽よりも軽いが才はある。歌の爲めに入牢したなどは思へない程な歌ばかりである。熱心な勤王家だと聞いたが、何処かに品のよいやさしいところがあつた人であらう。」と言ふ。

・瀧内弘章編『先哲和歌墨蹟百種』(大正十一年六月、山本文華堂)は、編者所蔵の「建治年間以後の縉紳名家、歌人大家達の懐紙、色

紙、詠草等百余点を以て玻璃版に印刷し「たもの。文雄は「寄神祝」と題する和歌一首「神ながら神のうたひし言の葉を摘らん人は千世もつみなん」(懐紙)が掲載せられる。

・井上通泰は、大正九年七月から十二月にかけて、「南天荘所蔵品絵葉書 第三輯」を発行する。⁴⁾「三三」は文雄の短冊二葉の写真版である。通泰は「南天荘所蔵品絵葉書」の解説をものしてをり、「第三輯」「第四輯」を扱った『南天荘絵葉書解説 二』(大正十年十月、久保田米齋)に於て、先の短冊の翻字「官軍大城に入ぬる日 今よりはたが宝田となりぬらむ君が千代田はよそにかられて 文雄」(札問局の獄屋につながれて 稀也と世にいふ老の坂道にひと屋有とは思ひかけきや 文雄)を掲げ、「文雄の短冊はあまりに多く伝はつて居てめづらしくないから今後も特色あるものに限つて、出すことにしよう」と言ふ。解説は『南天荘蔵幅写真帖』(大正十年十二月、日本巧芸社)とほゞ同内容の記述。

・児玉尊臣「近世国文の解釈」(大正十一年十月、三宅書店出版部)は、高等学校受験用の参考書。『調鶴集』より和文二篇「旧都をすぎしときのこと」「古戦場」を収録。

二、昭和期

・上野の古書肆文行堂より刊行せられた雑誌『短冊』であるが、復興十二号(昭和二年一月)には、文雄の兎を描いた短冊「世の中

のうといふ事をよそにしてよき耳をのみ長くきかはや 丁卯はる六十八翁文雄」(小川清次蔵)が写真版で掲載せられる。⁵⁾

・磯稻綺道秀「長歌軌範」(昭和五年八月、長歌軌範刊行会)は、『調鶴集』所収の長歌を六首としてある。正しくは「詠旅宿花歌并短歌」「感阿州岡氏兄弟高行作歌短歌」「伊賀の中将の君の御前、御国にかけらせたまふ御うまのはなむけによみてたつまつる」「安政戊午秋日有感作歌短歌」「詠大砲歌短歌」の五首。「橘」といふ題の長歌が収められてゐると記してあるのだが存疑。

・藤田徳太郎「国文学襍説」(昭和七年一月、六文館)は、幕末期の和文に就て、「滋野・貞融・井上文雄・伊達千広の三家は、何れも個性に富み、各特色を備へてゐる点に於いて異色がある。何れも不羈奔放の趣があり、他の物語文を模倣した典麗雅趣の味ある文章に比しては著しく男性的で、時としては、雅文擬古文の概念にはまらないものさへある。」と言ひ、文雄を「すぐれた雅文家である」と絶讃してゐる。

・市毛保家「擬古文新釈」(昭和七年十二月、栄光社)は、『柯堂文集』より「惜花」「暁擣衣」「旧都」「長歌論」「竹」の五篇を収め、語釈、通釈が為される。『柯堂文集』に就ては未詳。『柯堂文章』(天理大学附属天理図書館所蔵)には、「竹」以外の四篇が収録せられ、「竹」の出典が気にかゝるところである。

・渡辺刀水「国学者の評判記」(『歴史と国文学』十卷一号、昭和九年一月)↓「渡辺刀水集」(昭和六十年五月)は、井上淑蔭の家にあ

つた、守部風の書きぶりである国学者の評判記を翻刻紹介する。文雄は「由豆流の塾にゐた時分から放蕩にてまだ直らず剩へ穢多付あり歌も奇調狂語多し」と評せられてゐる。

・川田順は、『愛国百人一首評釈』（昭和十八年五月、毎日新聞社）所収本居宣長の自讃歌「しきしまの大和ごころを人間はば朝日に匂ふ山ざくら花」の解説に於て、文雄の一首「いさぎよき大和心を心にて他国には咲かぬ花ざくらかな」といふが、散り際の潔さに関して「最も普遍的な桜花礼讃」の歌であると説く。

・名古屋の好事家鈴木半右衛門は、自身の還暦記念として所蔵する名家書翰を纏め『鶴はし』（昭和十三年九月、鈴木半右衛門）を編んだ。文雄の「延充」宛書翰一通を収める。

・佐佐木信綱『日本名筆全集短冊集』（昭和三十四年一月、雄山閣）には、文雄の絵入短冊「いつもきく（からす）」（鈴木註……鳥の絵）の声のかうまでも長閑けき物かはるの初空 六十七翁文雄」（渡辺刀水所蔵）が影印で掲載せられる。

・国立国会図書館参考書誌部編『国立国会図書館所蔵貴重書解題第五卷（名家短冊の部）』（昭和四十八年三月、国立国会図書館）は、同館所蔵にかゝる『手鑑』一帖一軸（請求記号WA48-1）、『名家短冊帖』二帖（WA48-3）、『諸家短冊帖』一帖（WA48-2）、『名家短冊帖』三百三十七枚（WA48-4）の四点から名家短冊を翻字紹介する。文雄は、「冬竹 木にもあらず草にもあらずぬくれ竹は霜に雪にもうてぬ成けり 文雄」（名家短冊帖 WA48-3）、「新竹 若竹の陰なつかし

く成にけりなにの匂ひも花も無れと 文雄」（諸家短冊帖 WA48-2）、「漁村千鳥 あまの子かせとにくゆらすもくつ火の烟の末に千鳥啼也 文雄」（名家短冊帖 WA48-4）の三枚が収められてゐる。三枚目第四句「烟の末に」とあるが、正しくは「烟の末に」。なほ、この短冊「あまの子かせとにくゆらすもくつ火の烟の末に千鳥啼也」と改行箇所が珍しい。

・大阪の医家にして短冊蒐集家藤本太郎の編になる『淡花の匂』（昭和五十二年八月、前田成雄）は、藤本の蒐集した短冊の影印版。近代のものが中心だが、文雄の絵入短冊「うれしさを今より何につ、むらんよろつき袖萬そきそて 文雄」も収められる。なほ、この短冊、現在では架蔵するところとなつた。

・塚本邦雄の編纂した詞華集『珠玉名歌仙』（昭和五十四年六月、毎日新聞社）、斉明天皇から森嶋外に至る歌人の詠、百十二首に鑑賞を施してをり、文雄は「岡越えの切り通したる作り道卯の花咲けり右に左に」（調鶴集・一四六）が採られてゐる。「小うるさく説明的などころはなく、歯切れのよいところ、なかなかの技倆と言ふべきだらう。」と評し、また「隅田川中洲をこゆる潮先に霞流れて春雨の降る」（調鶴集・六三）をも引き、「幕末歌人の中では抜群の一人と言はれる。」と文雄を高く評価してゐる。

・漆山天童（又四郎）が「明治末より四十年の間「人名録」と称してカードをとり続け」（例言）、後藤憲二によつて完成を見た『近世人名辞典』（昭和五十九年四月、昭和六十二年一月、青裳堂書店）に

は、文雄も立項せられてゐる。「法躰尤美僧なり。」の寸評が面白い。

三、平成・令和期

・『発禁本』の続編として昭和四十年十一月桃源社より刊行せられた、城市郎『続・発禁本』、平成三年八月には福武文庫の一冊として装ひを新たに「近代日本発禁小史」を附して上梓せられた。「近代日本発禁小史」に、明治初期の発禁事件として『諷歌新聞』一件が語られる。

・谷澤永一が「空前にして恐らく絶後の、最も鋭く包括的な奥行き深い傑作」(『えらい人はみな変わつてはる』平成十四年六月、新潮社)と称讚した、小西甚一『日本文藝史Ⅴ』(平成四年二月、講談社)では、千蔭春海の系統として、清水浜臣、中島広足、文雄が挙げられてゐるのだが、「かれらの師系が明らかほどには、歌風の差を識別できるわけではない。京の桂園派と対立したのは、歌風の問題ではなく、世俗的な歌壇勢力の争いにすぎなかつたらう。」と些か手厳しい。

・三好行雄、竹盛天雄、吉田熙生、浅井清編『日本現代文学大事典』(平成六年六月、明治書院)には、福島タマの執筆による「井上文雄」『調鶴集』が立項せられる。

・『短冊Ⅱ 鉄心斎文庫所蔵菅澤新二コレクションより』(平成十五年四月、鉄心斎文庫伊勢物語語文華館)には、「小松内府 はかなく

も平野の小松かれぬるか神の守りも及ばざりけむ 文雄」の短冊一葉が影印で掲載せられる。

・古代から現代に至る著名人の辞世を網羅した、荻生待也『辞世千人一首』(平成十七年七月、柏書房)。文雄の辞世「老いはてて命惜しとは思はねど死ぬとおもへばかなしかりけり」も収録せられる。

・久保田淳、長島弘明編『名歌名句大事典』(平成二十四年七月、明治書院)には、「調鶴集」より「忘れては待つべき親もなき宿へ暮れぬ先にといそぎけるかな」(九三三)の一首が採られ、田代一葉の鑑賞を附す。

・鉄心斎文庫短冊研究会編『むかしをいままに 鉄心斎文庫短冊総覧』(平成二十四年九月、鉄心斎文庫伊勢物語語文華館)は、鉄心斎文庫が所蔵する短冊約四千九百枚の総覧。図版編、積文編の二冊より成る。積文編には翻刻とともに略伝が記される。文雄の短冊は四十三枚にも及ぶ(図版編に「小栗何がしか鬼鹿毛を庭乗せるかたに 物のふが猛きこゝろの鬼鹿毛のうまはた世々にいひはやしけり 文雄」が掲載)。うち『調鶴集』所収歌は十首(五四・九五・一五六・三四七・四五七・六二九・六五九・七一六・七八一・八五六)。なほ、この十首中には若干『調鶴集』と異なる歌も存する。「文雄」と署名する際、「雄」の字が図案化したものを、「文(花押)」と捉へてゐる。

・三ツ松誠「天野勝義宛井上文雄書簡」(『紙魚之友』三十号、平成二十四年十二月、房総史料調査会)は、「第三次夷隅郡大多喜町大

多喜・正木（天野）家所蔵文書調査において撮影した」大多喜藩士天野勝義（胖三郎）宛文雄書翰の紹介。文久二年（一八六二）のものと推定せられてゐる。文雄が大国隆正、大畑春国（隆正門）の學問を評価してゐないことが語られる興味深い書翰である。

・中澤伸弘「徳川時代後期歌人の交流―井上文雄と磯部長恒との一考察―」（『澁谷近世』十九号、平成二十五年三月）では、三重県鈴鹿市文化振興部（三重県立図書館寄託資料）所蔵にかゝる磯部長恒宛井上文雄書翰十八通の翻刻紹介。磯部長恒（寛政九年く明治三年）は、神戸町年寄にして文雄門人、文雄より三歳上となる。十八通ある書翰の中で年紀が特定（推定）出来るものが十六通、不明のものが二通、時代を逐うてみるに、安政五年（一八五八）から明治初年にかけての書翰といふこととなる。「幕末といふ世上不穩の時期であつてその緊迫した状況がところどころに伺へるものとなつてゐる。」と解説する。

・渡辺守邦、後藤憲二編『増訂新編蔵書印譜』（平成二十五年十月）（平成二十六年十二月、青裳堂書店）は、『新編蔵書印譜』（平成十三年一月、青裳堂書店）の増補版。文雄の蔵書印に就ては、増補せられず「歌堂文庫」一種のみ。

・田中康二「本居宣長の文学史研究」（『鈴屋学会報』三十号、平成二十五年十二月）↓「文学史成立史」と増補改題し、『本居宣長の国文学』平成二十七年十二月、ペリかん社所収）に於ては、文雄が「文学の史的 연구への萌芽を読み取ることが出来る文章を記してい

る。」と紹介せられ、「物語日記」（『伊勢の家づと 初篇』所収）が引かれる。其処から文雄が、「ジャンル別に文学作品を整理しようとする意識がうかがえる。」と結論づける。

・田中康二「玉あられ」受容史」（『渾沌』十一号、平成二十六年三月、近畿大学大学院文学部研究科）↓「本居宣長の国文学』平成二十七年十二月、ペリかん社）は、「歌学書とも言えるし、考証隨筆にも分類できる。また語学書の性格も有している」、本居宣長の著『玉あられ』の「近世後期における受容史」。文雄に就ては一節が設けられ（『五、江戸派の手土産―井上文雄「伊勢の家づと」」、文雄の「伊勢の家づと」は、「玉あられ」の「好ましい修正」であり、村田春海『歌がたり』の言説を受け継いで論を展開してゐると説く。・坂倉賢芳「再編竹柏園姓名録』（平成二十六年四月、龍淵寺）は、『竹柏園姓名録』（平成十八年八月、龍淵寺）を大幅に増補したもの。『竹柏園姓名録』では収録人物が二千名程であつたが、『再編』では、三千四百名余となる。弘綱は文雄に学んでゐた為、文雄門下の国学者歌人の名が散見せられる。

・山下久夫は、浄土宗の僧侶にして音韻学者である文雄（モンノウ／ブニュウ）と井上文雄とを混同してをり、「宣長・自国中心主義的言説の再検討―「漢訳」された「西洋」流入の中で―」（田尻祐一郎、西岡和彦、城崎陽子、山下久夫、志水義夫『文学研究の思想』平成二十六年五月、東海大学出版部）に於ても『磨光韻鏡』の著者で韻学の大成者として有名な井上文雄が「九山八海解嘲論」

を著し」と、僧文雄の業績を認識してゐない。

・平成二十五年四月に、古典ライブラリーが運営する日本文学データベース図書館の一として配信せられた『和歌文学大辞典』だが、翌年には書籍版が刊行せられる(『和歌文学大辞典』編集委員会編『和歌文学大辞典』平成二十六年十二月、古典ライブラリー)。「文雄」の項目は勿論の事、著述に関しても、「伊勢の家苞」「老のくりこと」「大井河行幸和歌考証」「さきはひ草」「調鶴集」「摘英集」「廿一代集類字」「道のさきはひ」といふ八作品が採り上げられた(いづれも鈴木亮執筆)。なほ、師である「由豆流」(鈴木よね子執筆)、「千古」(鈴木亮執筆)も立項せられてゐる。「さきはひ草」の刊年を元治元年としてゐるが、正しくは慶応二年跋刊。

・鈴木亮「井上文雄著述目録稿」(『成蹊國文』四十八号、平成二十七年三月)は、文雄の著述に関して『国書総目録』の記述を増補し、解題を附して纏めたもの。在世中に刊行せられたものを主とするが、歿後に編輯せられたものに就ても解説する。

・鈴木亮「井上文雄『調鶴集抄』―翻刻と解題―」(『成蹊人文研究』二十三号、平成二十七年三月)は、先に掲げた森田義郎編『調鶴集抄』の翻刻と解題。正宗敦夫編輯発行による歌学雑誌『国歌』及びその附録は閲覧が実に困難な状況であるため、架蔵するに至つた同書を紹介した。

・中澤伸弘「徳川時代後期歌人井上文雄の書」(『若木書法』十四号、平成二十七年三月)は、「文雄の書を通して、その書き様の伝

播」を考察した論考。文雄の筆致を「雄渾であり、力強い印象を与えるもの」と捉へてゐる。文雄の筆蹟が門人たちに継承せられたことにも言及してゐる。文雄、大野定子、松の門三舂子(二葉)の短冊、文雄色紙、「類題和歌聯玉集」(明治十二年刊)大野定子序の影印が末尾に掲載せられる。

・『美與之野帖』を、『国書総目録』に於ては文雄の著作、鈴木亮「井上文雄著述目録稿」では藤堂高猷の家集としてしまつたといふことに就ては、原本を具さに検めてゐないがために生じた誤りである。文雄は跋文を記したに過ぎない。かういつた類ひのことは間々起こり得ることであり、肝に銘じなければならぬ(自戒の念を込めて)。鈴木亮「藤堂高猷書『美與之野帖』傍註」(『成蹊國文』四十九号、平成二十八年三月)では、『美與之野帖』が、文雄に歌文を学んだ伊勢津藩主藤堂高猷の筆になる書道手本であることを確認し、高猷短冊の影印を掲げる。

・柳川市史編集委員会編『井上文雄判柳河藩歌合集 柳川文化資料集成第一集―二』(平成二十八年三月、柳川市)は、幕末期、柳河藩主立花鑑寛とその周辺で実施された、井上文雄判の歌合四十五冊と一卷を翻刻したもの(編集担当亀井森、補佐阿比留章子)。亀井森「解説」及び鈴木亮「井上文雄小伝」を附す。

・後藤憲二編『類聚名家書簡 首編』(平成二十八年四月、青裳堂書店)は、東京都立中央図書館特別文庫室渡辺文庫所蔵の「尚徳」宛文雄書翰を写真版で掲載する。なほ、「例言」に「図版巻完結後、

釈文・注文冊を刊行予定である。」といふ案内が記される。

・萩野由之の蒐集、編纂にかゝる名家筆蹟を収めた「集古筆翰」は、長谷川強、岡崎久司の編輯のもと『大東急記念文庫善本叢刊中古中世篇別巻四 集古筆翰』影印篇、翻字・解説篇（平成三十年三月、汲古書院）として刊行せられた。「第七輯（和歌）」に、文雄の「うくひすの声せぬのみそ九重のうめのさかりのあかぬ成ける」といふ一首の懐紙が収録せられる。文雄の略伝は鈴木淳の執筆。

・内田誠一、増田知之、吉良史明「近世から近代にかけての短冊の諸相」（公益財団法人日本習字教育財団学術研究助成成果論文集）四巻、平成三十年三月）「第二章 近代における短冊蒐集とコレクションの影印―御歌所寄人・井上通泰のコレクションを探る―」（内田誠一執筆）では、大東急記念文庫所蔵井上通泰旧蔵「短冊手鑑」が紹介せられる。「短冊手鑑」に文雄の短冊は四枚収められてをり、『諷歌新聞』筆禍によつて礼問局に捕へられた折の歌を採り上げ、その史料価値が考察せられる。署名を「文（花押）」とすべきものがあることを指摘。すなはち「雄」をデザイン化した花押が書かれている。」といふ主張である。

・明治元年（慶応四年）の出来事とその当時の人々の状況を活写した、田中仁「明治元年（一八六八）政治・文化の解体と再構築」（鈴木健一編『輪切りの江戸文化史』平成三十年十月、勉誠出版）では、戊辰戦争、明治新政府に関して論じてある箇所にて、文雄、草野御牧の発刊した『諷歌新聞』の歌が引かれる。

・鈴木亮「江戸派の終焉―徳川時代後期歌人井上文雄の学統意識―」（『成蹊國文』五十二号、平成三十一年三月）では、文雄の学統に対する意識を考察し、その学問が自由闊達であつたことを指摘する。

・濱田啓介の大著『国文学概論』（令和元年六月、京都大学学術出版会）は、文雄を評して、「情趣・用辞は雅の中に閉じられず、俗が加味されており、その点において江戸派らしさを示す。」といひ、田園農村を詠じた歌をその特徴としてゐる。

をはりに

拙稿は一先づ置き、近年、井上文雄を俎上に載せる論考が若干増えてきたやうな気がする。百年程前の言ではあるが、佐佐木信綱が文雄を「江戸派の殿将として幕末の歌壇に光を放つた歌人」（『近世和歌史』大正十二年一月、博文館）と評したことの意味は重いものがあらう。最早文雄を等閑視し続けることは出来なくなつたのであるまいか。

文雄の詠歌、歌論を丹念に考察するためにも、活字化せられてゐない家集、歌論書の翻刻が急務であるのだが、雑事に取り紛れ未だ果せずにある。

【註】

(1) 『文海』(一号、明治二十六年四月) 巻末に「本会監督并に賛成諸君(いろは順)」として、飯田武郷、萩野由之、坂正臣、中村秋香、落合直文、大和田建樹、黒川真頼、久米幹文、増田于信、小中村清矩、小杉楳邨、小中村義象、佐々木信綱、木村正辞、本居豊穎、関根正直の名が挙がる。

(2) 『大八洲』(二十一巻八号、明治三十九年八月) 刊行の二ヶ月前、矢張り森田執筆による「忘れられし井上文雄」(『日本人』四百七十三号、明治三十九年六月) があるのだが、これは『大八洲』所収「忘れられし井上文雄」の一部分を抄出したものとなつてゐる。『日本人』収録の論考に就ては、「井上文雄研究史(補遺)」にて紹介した。

(3) 『近代文学研究叢書第四十五巻』(昭和五十二年七月、昭和女子大学近代文化研究所) 所収「森田義郎」の「著作年表」には記載なし。同書には、森田義郎「井上先生の歌(一)〜(八)」(『毎日新聞』明治三十九年四月二十日〜五月二日) も文雄関連の文献である旨の記述があるのだが、これは井上通泰の歌を評した文章である。

(4) 第一輯の発行は大正八年六月から十二月。第六輯(大正十一年)迄発行。

(5) 中島利一郎所蔵の短冊には「けふよりはうといふ事をよそにしてよき耳をのみ長くきかばや」とあり初句が異なる。なほ、

同短冊にも「白短冊の金粉の上に丁卯に因んで、兎の絵が薄墨で書かれてゐる。」(中島利一郎「井上文雄と集外遺作」『学苑』十巻八号、昭和十八年八月)

(6) 山下久夫「本居宣長と「自然」」(昭和六十三年十月、沖積舎)。拙稿「井上文雄研究史(補遺)」にて指摘。

(7) 中澤伸弘「和歌文学大辞典」(同編集委員会編古典ライブラリー刊) 覚え書き(「澁谷近世」二十一号、平成二十七年三月)

【附記】

拙稿「井上文雄研究史」にて、大和室輯「近世花押譜」(『集古甲子第五号、大正十三年八月) を紹介したが、「近世花押譜」は『三村竹清集一』(昭和五十七年四月、青裳堂書店) に収録せられる。短冊の署名の仕方に関して、「雄」の字を凶案化せられた花押と捉へた最初の論考であらう。

資料の閲覧に際して、元同僚千葉知美氏には格別のご配慮を忝うした。記して感謝申し上げる次第である。

(すずき・りょう 東京都立江北高等学校教諭)